



引きこもり少女を親に隠れて洗脳レイプし、
思い通りの愛奴隷にする話

普段生きているうちで楽しいことがいくつあるだろうか。辛いことが大半だと思うのは生き方のせいなのか。

少なくとも、今オレは心躍るような期待をもっている。
それはあまりにもドス黒いものだったが……。

第1章 狼少女と狼男

忙しい仕事の最中にかかってきた一本の電話に、オレは仕事の手を止めざるを得なかった。

それは親戚の叔母からの相談の電話だった。

普段なら単に叔母からの電話なら挨拶だけで適当にあしらっていたが、その相談内容が叔母の一人娘の真理についてだったので、オレも耳を傾けることにした。

社会人になる前は親戚同士の交流もあって叔母の家の事はよく知っていた。

ここ何年かまともに会ってないが、真理はオレに懐いていた子で、今は中学三年くらいになるはずだ。

その真理が最近学校へ行くのを拒否してずっと部屋に閉じこもり、家族にも顔も見せようとしならしい。

その前から口数が少なくおかしい前兆があったそうだが、理由を問いただそうとしても物を投げつけて叫ぶだけでまったく取り合おうとしないという。

娘がこのまま引きこもりになるんじゃないかと叔母は心配で仕方なかったが、叔父は仕事だけの人間で現状に目を瞑っていて関わろうともせず、

大事にして周りに知られるのも恥ずかしいというのも相まって、叔母も頼る人間が見つからず回りまわってオレに相談してきたそうだ。

娘はオレの事を気に入っていたからと、電話越しに叔母は付け加えてきた。

社会人のオレにそんな理由でも思ったが、たしかに他に適任者はいなさそうだ。真理もオレになら話そうとするかもしれない。

オレはしばらく考えてから、その話を快く了承した。

真理を助けない——。

それは嘘偽りの無いオレの本心だ。

しかし、その裏の下衆な思索を覆い隠す建前でもあった。

オレがこの話を受けた本当の理由は、

妹のようにかわいがっていた真理の事を思い出し、ある計画を思いついたからだった……。

その日、オレは仕事を早めに切り上げ、叔母の家へと向かった。
少数数のプロダクション事務所で働いている性質上、やることをやっていたら外回りの寄り道程度で目くじらを立てられる事も無かったから、昼間にたずねること自体は難しくない。

閑静な住宅街の一角に叔母の家があった。

ピンポン

インターフォンを鳴らす。
室内からスリッパが床板を鳴らす音が響いて、扉が開いた。

「あらいらっしゃい、ひさしぶりね」

「こんにちわ。おひさしぶりです」

叔母と挨拶をしながら玄関に上がり、軽く情報交換代わりの談笑をしてから本題に入る。

「それで、真理の様子はどうなんですか？」

「あの子、ここ何週間もまったく部屋から出てこないの。
出てくるときも私たちに見つからないようにこっそり出てくるみたいで。一度出て来た時に捕まえたんだけど、ものすごい癡癡起こして」

「理由は何かわかりますか？」

「いえ、学校で何かあったみたいだと思うんだけど……それすらはっきりしなくて。私も夫もいろいろ忙しいでしょ。あの子の事を気にかける時間も無くて」

そういえば叔父は、昔から遊びに来てほとんど家にいなかった気がする。
叔母も叔母で忙しいといえれば忙しい人が、社交面ばかり強くて、いろんな会や集まりに顔を出すことばかりに夢中で、一箇所に留まっていない人だった。

そんな家庭環境だから真理も小さい頃はよくうちに預けられていて、普段からあまり遊び相手もいなかったのか年の離れたオレに遊んでもらうだけでいつも喜んではいった。

「真理は何か言っていましたか？」

「もう誰とも顔を合わせたくないって。今じゃ私とも口を利こうとしないの」

「思春期のせいじゃないですか。何かいやな事が重なっただけかもしれませんよ」

「でも、一歩も外に出ないのよ。外が怖いって」

「……対人恐怖症なのかもしれませんね。何か強いプレッシャーを受けたのかも。僕は医者じゃないからわかりませんが。一般論的に」

「どうでしょう……」

オレが知っている真理のままなら、誰とも心を開いて話せる相手もないまま、過度のストレスに苛まれて内に籠もってしまったのかもしれない。ただでさえ環境の変化や対人関係が難しい時期だ。そういうこともあるだろう。

「僕なら顔も知ってるでしょうから、いい話し相手になるかもしれません」

「本当にお願ひするわ。もう他に頼る人がなくて。あの子今年で受験でしょ。こんなことして良いわけ無いことぐらい本人も分かるでしょうに、まったく——」

「時間ももったいないですし、さっそく会って来ます」

このままだと叔母の愚痴に付き合わされそうなので、話を切って急かせる。案内されて階段の前に差し掛かると、叔母は上を指差した。

「あの子の部屋は二階の奥よ」

「叔母さんは下にいてください。ここからは僕一人の方がいいでしょうから」

「本当にごめんなさいね」

「いえ。ですが、叫んだり物を投げつけられたりくらいはされるかもしれません。でも僕の方はそれぐらいなんでもないので、叫び声や大きな物音がしても心配せずそのまま待っててください。二人で話さない事は打ち解けてもらえないでしょうし。下手に抛れると元も子もないですから」

「ええ、わかったわ……」

「そんな心配そうな顔しないでください。僕も彼女の家族みたいなものですから、必ず立ち直らせてみせますよ」

「ありがとうね……」

今にも泣き出しそうな叔母を尻目に、オレは階段を軽いリズムで昇っていった。

2階の廊下に上がると、そこは異様なほどの無音な空間で、逆に不穏な空気を感じずにはいられなかった。奥に真理の部屋がある。重いどんよりとした空気はそこから流れてきていた。

オレは中の住民に何の躊躇も悟らせないように、スタスタと歩いてドアの前つくと、ドアノブに手をかけた。

ガチャ——

パンッッ！！

開けようとしたその瞬間、ドアに物がぶち当たる衝撃が走った。少しばかりオレも戸惑ったが、この程度の事で驚いてはしょうがない。

扉を静かに開けると、そこには廊下の明かりも避けるほどの真っ暗な空間があった。窓も目張りをしてあるのか昼の光は何一つ入らない。空気がまったく入れ替えされない部屋特有の臭気とアンモニア臭が鼻に刺さる。食い物の散らかしから脱ぎ捨ての服からいろんなものが部屋中に散らばっていた。

「でてけっ！」

部屋の中から金切り声のような悲鳴がオレを打つ。その声でこの部屋の主がどこにいるかわかった。ベッドの横で毛布が蠢いている。

「真理…。オレの事を覚えてるか？」

「誰っ！？ 早く出てけっ！」

家族以外の声に驚いたのか、真理の声に怯えが入る。オレはその攻撃的な言葉を無視して部屋に入った。

ガチャン——

オレは扉を閉めて明かりをつけた。薄汚い部屋が照らされ全容が見える。そこら中ベットボトルやら食器やらゴミが散乱していて足の踏み場も無い。

「電気つけるなっ！」

真理の顔を見る前に本人は毛布に隠れてしまっていた。ベッドの後ろに隠れてこちらを警戒している。

「ハァ…」

オレはため息を付きながら再び明かりを消し、目の前にあった蛍光スタンドの明かりをつけた。

「久しぶりだな。数年ぶりか」

「……誰っ？」

毛布の中の主がこちらを覗き見ると、驚いた顔で頭を出した。

「お兄ちゃんっ……」

「やっとなづいたか」

仕事に忙しく会うのは数年ぶりだが、オレの顔くらいは忘れていなかったようだ。

「何で来たの！ お母さんに呼ばれたの！？」

「ああ。叔母さんがお前を心配してオレを呼んだんだ。
一体どうしたんだ？ 聞かれないことなら叔母さんたちには話さないから、オレには話してみる」

「どうだっていいでしょ！ いいから帰って！」

「良くないからオレが来たんだ。別に怒ったりはしないから。理由くらいは話せるだろ？」

「いやだ」

「真理」

「……」

真理は押し黙ったまま、まともに取り合おうとせず、再び毛布に隠れて黙り込んでしまった。

「ハァ。困ったな」

こんなところで押し問答するためにわざわざ来たわけではない。

オレは真理のベッドに歩み寄る。
そして、毛布の端に手をかけて力強く手前に引っ張った。
真理も抵抗しようとしたが、思った以上の力だったのか毛布を掴んだまま前に引っ張られてつんのめった。

「いやっ！！」

真理は毛布を取り返そうとオレに向かってきたが、逆に汚れたシャツの襟首を掴み容赦なく毛布から引き離す。
ようやく真理が姿を現した。

「きゃっ！？」

荒々しい扱いに、オレを見る真理の表情が驚きと不安の色に変わる。
先ほどまでと雰囲気が違うことによりやく気づいたらしい。

オレは真理の襟を押さえつけたまま冷たく睨み付けた。

「お前がどうだろうと、叔母さんたちやひいては親族のオレたちが困るんだよ。普通にしていなくてみんながみんな困るんだ。わかるか？」

「そっ、そんな知らない……」

力でねじ伏せ、容赦ない言葉を叩きつける。少しも同情する気は無いのだと見せ付けた。
真理も口ではまだ何とか威勢を張っていたが、怯えた瞳から涙が滲んでいる。さすがにオレの態度にショックを受けたのか。

少なくとも以前のオレは真理をか弱いがってやっていた。そのオレがこんな態度を取るとは夢にも思わなかっただろう。
孤独感に打ちのめされても不思議ではない。

真理の孤独を察すれば、これ以上追い詰めるのは酷だと思う。
オレが優しく接してやれば、さほど勞せず真理も心を開いたかも知れないが……。

しかし、それではオレの計画にそぐわない。

オレがここに来た“本当の理由”のためには、まず真理をボロボロになるまで徹底的に追い詰めなくてはならない。
精神的にも、肉体的にも……。

「どうした？ 優しくされるとでも思ったのか？ 勘違いをするなよ。みんなお前に失望してるんだ。厄介な人間が出たとな」

「ど、どうでもいいでしょっ。帰ればいいじゃない！ 私の問題に首突っ込まないでっ！」

「お前の勝手に周りを巻き込んでなんだその口の聞き方は？ 誰のせいだと思ってる」

「いきなり来てっ……久しぶりに会ったのに、何でそんなこと言うのっ！」

真理が感情的に叫ぶ。
目はオレを睨み付けていたが、今にも泣き出しそうなほど赤くなっていた。本当はオレに同情されたかったに違いない。

「お前だけの問題ならまだ良かったのにな。叔母さんも叔父さんも頭抱えてオレに頼み込む必要も無かった」

「関係ないんだから帰って！ 帰ってよっ！！」

「みんなお前みたいな屑とは無関係になりたいと思ってるよ。恥ずかしくて消えて欲しいってな。馬鹿な真似をしてくれたもんだ」

「うるさいッッ！！」

パチンッ！！

真理の強烈な平手打ちがオレの頬を打った。
感極まって思わず手が出たのか、平手打ちした当の本人が驚いていた。

「フン……」

オレは痛みに顔を歪めたが、すぐにニヤリと笑い返してやる。
そして、再び真理の襟首に力を入れると、反対の手で真理の頬を張り返した。

パチンッッ！！

「痛っっ！！？」

乾いた音と共に、真理の悲鳴が飛んだ。



「うう……」

苦痛に呻きながら唖然とした表情で真理はオレを見返した。が、オレの顔を見てその表情は恐怖のそれに変わった。真理の顔が恐怖で歪む。

オレは最高に薄汚い笑みで真理を見下ろしていた。

「あ……何…？」

あきらかに異様な空気に真理が怯えながら警戒心を示す。だが、オレは答えない。

後ずさりする真理の襟首を無言のまま両手で掴む。そして、力いっぱいその服を引き裂いた。

ビリビリッ！！

「きゃあああっつ！！」

悲鳴と共に、真理の柔肌と白い乳房が目の前で露になる。

「きゃあっつ！ いやあっつ！！」

俺の突然の暴挙に、自分が何をされようとしているのか悟ったのか、助けを求めようと真理は叫ぶが、その口を押さえつけ、ベッドに押し倒した。

「んむうっ！？」

「叫ぶな。叫んだところで誰も来ないがな。そういう風に言ってる」

抵抗する真理を抑え付け、下卑た表情で目の前の真理の肢体を凝視する。日に当たらない肌はとて白く、ろくに風呂にも入っていないのか薄汚れていて汗の酷い臭いがする。長い黒髪も股下まで届くほど伸びきって身体にまとわりついていた。運動しない体も締りがなく栄養不良で痩せてることと同極端な印象を与えた。それに顔に似合わない大きな乳房がイヤでも目に入る。



「今から自分が何されるかわかるな？」

オレは自分の服に手をかけ、その場で脱ぎ捨てた。さきほどから欲望で破裂しそうだったチンポをパンツから抜き出す。大きく反り返った肉棒がピクピクと湿をたらした。

それを見て真理の表情は余計に恐怖で引き曇る。だが、その顔は最高に魅力的だった。

「よし、次は下だな」

着古しの汚れたパンツを力ずくで脱がしにかかる。真理が両足をバタつかせて抵抗するが無駄な努力だ。顔を押しえつけて抵抗を許さずパンツを脱がせた。何日はき続けているのか、手に取っただけで臭ってくる。それをわざとらしく嗅いでみせる

「臭い。臭いぞ真理。こんな汚いもの履いてるとみんなに嫌われるぞ」

「んっぐうっ!!」

顔を真っ赤にして真理が必死に取り返そうとする。体格差的に弄ぶようなもので、ほとんど無駄なことだった。

「んんぐ〜っ!!」

「さて、まずは身体検査でチェックしようか。真理が引きこもった理由も分かるかもしれないから。傷は無い様だな。イジメられたわけじゃないのか？」

真理の豊満な白い乳房を手のひらで握りながら、乳首を指でこねる。やはり年の割に大きい。その乳輪も腫れ上がったように大きく、しゃぶりつきやすそうだった。

「大きな乳輪だな。これが不登校の原因か？」

「〜〜〜!!」

真理のがたうって抵抗する。案外図星かもしれない。



「じゃあ次は真理のかわいいおまんこだ。
誰かにレイプされたのが原因かもしれないから。
知らない男か、担任の教師か。まさか親父じゃないかな？」

真理の下腹部に手をやり陰部を指で開いた。
綺麗な色形だった。まだ幼さが残っていて、
誰かに遊ばれたような形跡は無い。

陰茎を撫でながら、膣の中まで指を入れようと中指を立てた。

「んんんんう！！」

真理の顔が苦痛で歪む。まだ男の肉を受け入れてはいないようだ。

「真理は処女なんだな。クククク」

つい笑いが零れる。真理は強くオレを睨み付けた。

「これはうれしいな。オレがお前の最初の男になれるんだから」

オレのその言葉に真理は状況をはっきりと理解したようだ。
見る見る顔が青ざめていく。
オレは真理にしゃべらせようと、
口を押さえてた手をゆっくり外してやった。
しかし、恐怖の懷いてるせいか真理は悲鳴を出せないようだ。

「いやっ、だめ。こんなのダメ……」

「なんでオレがここに来たと思う？ お前を手に入れるためだ。
このチンポでお前を一人前にしてやる。たっぷり舐もしてな」

「お母さんに話すよっ！！」

「話して誰が信じるんだ。
親戚中にオレにレイプされたって血まみれのマンコを見せるのか？」

下衆な高笑いに真理が言葉を失う。
まだオレの行動が俄かに信じられないのだろう。
彼女の中のオレはきっとやさしい兄として刻まれているはずだからな。



「お前は誰からの信用も無い。逆にオレは信頼されてここに呼ばれた。誰がお前の戯言に耳を貸す？どっちを信じるか火を見るより明らかだろう」

「……やだっ。やめて……お兄ちゃん……」

真理がすがるような声で涙を流して懇願する。彼女が見てるのは小さい頃の昔のオレだった。しかし残念ながら、今のオレは目の前を肉を味わうことにしか興味が無い。

「入れるぞ、真理……」

「いっ！ いやああっ！！」

オレは真理の足を抱えて陰部に肉棒を当てがい、膣に強引に押し付けた。

「痛いっ！！ いやっ！ ああっ！！」

「抵抗するなっ」

腰をくねらせて逃げようとする真理を押さえつけ、さらに腰を強く押し付ける。膣が肉棒を押しつけようとする。が、ギチギチと中にめり込んでいく。

「いざっ！ いやああっ やめえっ！！」

真理が苦痛に叫びながら逃げ惑う。全身を貫こうとする肉棒の痛みと恐怖に悲鳴を上げ続けていた。

「あざい！ ひざいっ」

「逃げるな。痛いののは最初だけだ。我慢しろ」

「ああっ！ あぐっ いざいっ！！」

真理の悲鳴をよそに徐々に膣は肉棒に食いついてきた。亀頭がでろりとした血の感触に包まれる。



「行くぞっ」

オレは種れあがった肉棒を真理の中に強引にねじ込んだ。

「あざいいっ!!? いざいいっ! ざいい! いだいいいっ!!」

真理の全身が反り返り、断末魔のような悲鳴が部屋に響きわたった。
号泣しながら全身を振り乱す。

血まみれの亀頭が膣の中へ押し入り、ギチギチと膣壁に締め上げられる。

「ハハハ。入ったぞ真理。オレのちんぽがお前の中に」

「あぐうっ! いっ いざいいっ」

腰を動かすたびに、体を貫かれた真理の悲鳴が響く。

「いざっ! いざいいっ!! あざいいっ!!」

破瓜の血がシーツを汚すほど零れ肉棒にまとわり付いた。
それが潤滑液となって、肉棒はさらに真理の膣の中へ中へと入っていく。
そのまま奥まで貫こうと、オレはさらに力をこめた。
きつい膣壁を押し広げるたびに、真理の体は壊れそうなほど跳ね上がる。

「いざいいっ! いぐうっ! ダメえっつ!
もうダメえええ! 壊れるっ 壊れちゃうううっ」

真理の手がオレの腕を掴み、血が出るほど爪を立てる。
尋常じゃない必死さが伝わってきた。

「やめでっ! 痛いっ! いだいのおっ!!
許してっ! お願いしますからああっ!!」

目を見開いて真理が号泣しながら懇願する。
どうやら限界らしい。
真理の膣は思った以上に小さいようだ。強引にねじ込んでるのに、
まだ奥までまったく届いていない。

さらに恐怖と苦痛で膣に力を入れすぎて、
よりきつくなって痛みが激しくなってるようだ。
オレのチンポも痛みを感じるくらいなのだから、
ねじ込まれる真理は余計だろう。



「もっと膣の力を抜け。余計に苦しいだけだぞ」

「そ、そんなのできないよううっ」

真理はワンワン泣き出してしまった。

このままでは仕方がない。
一度肉棒を引き抜く。膣からさらに激しく鮮血が零れた。

「後ろを向け真理。こうだ」

真理の体に背を向けさせた。
わけが分からず背面にこちらを窺う真理を無視して、その腰を掴む。

「尻を上げろ」

「いやぁっ、痛いのおっ！ 何でもするからもう止めてええっ！」

「うるさい黙れっ！」

今度はバックから挿入する。
自然な姿勢のおかげでさっきよりは緩く感じる。

「いざいっ あぐうっ！ あがっ いあっ！」

真理の白い尻に腰を押し当て、肉棒をさらにねじ込む。
膣壁に締め上げられながらも肉棒は奥へ奥へと徐々に入っていった。

「あがっ いっ いざっ！」

その間も真理は両目に大粒の涙を浮かべ、
体を駆け巡る激痛に悲鳴を上げ続けていた。

「もうちょっとだ。子宮にぶち当たるまで我慢しろ」

「あっ… ああ ああっ あっ！」

真理はもう叫ぶ余力も無かった。
動く部分でピストンを繰り返し徐々に膣を押し広げてく。
何度も何度も突き刺されるうちに真理のマンコも徐々に緩み始め、
肉棒の突貫について屈しようとしていた。



「一気にやるぞ」

もう十分だろう。
オレは真理の肩を掴み力を込める。
その全体重をかけて、真理の中へ亀頭を突っ込んだ。

「いぎっつっ!？」

何かのはじけるように亀頭が子宮に飛び込み、
その奥の壁に叩きつけられた。

「あがっつ!？ あざいいいいいっつっつっつ!!!」

真理の全身が電流が流れたように跳ね上がった。
咆哮するように口を開け、白目を剥き、真理はビクビクと痙攣していた。

「入った。全部はいったぞ。ハハハ、森通だ。よく我慢したな真理」

「あひっ あふっつっつ あああっつ ああっつ」

「どうした、処女喪失したんだぞ。
恥ずかしがらなくてもいいからもっと喜べ」

「あひいっ いいい ひ、酷いろうろうう」

「何泣いてるんだ。昔はオレの事が大好きだって言ってたじゃないか。
好きな男が初SEXの相手だったんだぞ。レイプだけだな」

わざとらしく悔辱のような囁きをする。
真理はもうわけがわからないといったような感じで泣き崩れていた。

だが、こんなもので終わらせる気は無い。
まだやるべき事が残っている。



「さて、次はオレが満足する番だな」

「えええっ!？」

再び真理に正面を向かした。
正上位の体制で、再び肉棒をあてがう。

「まだやるのおっ!？ ヤダっ! やだああ」

「まだオレが射精してないだろう。一人だけ楽しむのは反則だぞ」

真理の陰部にまた挿入し、オレは腰を押し付ける。
亀頭がまた腺壁にめり込む。
まだきつかったが、すぐに真理の体の方が慣れてくるだろう。

「あぐっ! いやっ! もういやっ……」

真理が気が動転したようにシーツを掴んで逃げようとする。
もはやそんな気力も無いだろうに。

「こんなのお兄ちゃんじゃない。こんなの……」

「うるさい口だ」

オレは容赦なく真理の喉仏を片手で締め上げた。

「いざいっ!？ いいいい」

首を絞められ真理がバタバタと両手足を動かす。
疲れ果てた体は逃げ出す余力などあるはずが無い。



青ざめていく真理の表情を見下ろしながら、オレは容赦なく腰を動かす。膣だけはオレを締め上げていたが、それがさらに絶頂感に拍車をかける。

首を締め上げるほど、膣はさらにきつく締まってくる。その感覚が癖になりそうだった。

「死ぬう しぬううう……」

零れるような声が真理の唇から漏れる。身体はまだ抵抗しようとしていたが、それが取まった時、腰に何か温かいものが当たった。

「ううっ うううう……」

真理は失禁していた。アンモニア臭を放つ生温かい黄色い液体がピチョピチョとオレの体に当たってシートへと広がる。

恐怖と苦痛と絶望に、精神が負けた瞬間だった。

「フフフ ははは」

サディスティックな俺の本能がそれを見て高まる。オレはそのまま容赦なく腰を振り続け、真理を陵辱し続けた。



「きついな、本当に」

真理の腰をグッと掴み、重く体重をかけてゆっくり腰を振る。
そのたびに真理が悲鳴を上げた。

「あっ いざっ！…あ…うぐう…っっ！」

首を閉める力を強めるたびに、キュッと真理の體肉が締まる。
逆に真理の表情は青ざめていくが、
恐怖を与えた方が自分の立場をより良く理解するだろう。

「うぐうっ……うう……あぐ……」

乳房を鷲づかみにして形が変わるほどグニグニと揉んだ。

「揉みがいいのあるいい乳房だ。乳首も吸いやすそうだな」

顔を近づけてもう片方の乳首に噛み付く。

「いざいっ！ いいっ うぐうっ！」

体中に駆け巡る苦痛と恥辱にめちゃくちゃになった真理が暗ぐ。
耐え難いその痛みに身体中をこぼらせながら、
オレが満足するまでただただ必死に耐えるしかなかった。
抵抗もろくにできず犯され続ける様はグッチワイフそのものだった。

腰を強く固定して、奥深くにチンポを沈め込む。
真理はもう抵抗することも無く泣き声を上げ続けるだけで、
リアクションを取る余力も無いようだ。

もう少し遊びたかったが、そろそろ許してやるか。

「あがぁぁ…！ あ…あぁっ …うぁっ…ダメえ…ん…くっ！！…」

「真理そろそろ行くぞ」

「あぁぐっ、あぐっ！……うっ うぐぐっ……！」

もはやオレの言葉を聴く余裕も無いらしい。
真理の苦痛な悲鳴ばかりが部屋にこだます。



「出すぞ。初めての精液だ」

「えぐっ……あい！……いっ……っ」

反り上がった肉棒を一気に引き抜く。
亀頭が震えて絶頂へと駆け上がり、先から精液が溢った。

ビュルッ ビュルルルッ！！

生暖かい精液が真理の体に撒き散らされる。

「あいっ！ あっ あぐうううううっ……！！」

真理の弱弱しい悲鳴が部屋に響いた。
その目は白く熱い液体を見て心底怯えていた。



ようやくチンポを引き抜かれ、真理の体からグツタリと力が抜ける。

オマンコは小便と破瓜の血でグチョグチョだった。
オレの肉棒も。

身体には溢れるように出た精液がそこら中にべっとりとついていた。
オレは龟头を真理の柔肌に押し付け、精液をすべて搾り出す。

真理はすでに事切れたように失神していた。

その姿に死んだ少女を犯すような背徳感を覚えたが、
もう一度はさすがに真理の体が耐えられないだろう。

オレは真理を介抱し精液と破瓜の後をふき取ってから服を着せた。そのまま寝ている彼女を起こさぬようその場を後にした。

いくつか部屋のゴミをもって一階へと降り、叔母に“努力”の証拠としてそれを渡す。

叔母はまったく気づいてないようだった。

それどころかオレの赤くなった頬を見て謝ってきた。

オレは上で娘をレイプしたことなどおくびにも出さず、また明日来ると笑顔で会釈しその場を後にした。

真理は起きたらどう反応するだろうか……？

また泣き崩れるか、怒りで母親に話すか。

どうしてもオレには良かった。何とでもなるからだ。


それに、真理は多分話さないだろう。

彼女には味方などいないのだから。

まずは真理を追い詰め精神的に縛るのだ。

それが済んだら、真理の調教をはじめよう。

今日は始まりでしかない。真理をオレの愛奴隷にするための……。



信じていた者の裏切りに、さらに孤独へ追いやられる真理。
その彼女を、主人公はさらに肉体的精神的に追い詰めていく……。

苛烈な調教の果てに心を支配された真理は、壊れた心を修復することができるのか——

引きこもり少女を親に隠れて洗脳レイプし
思い通りの愛奴隷にする話

5月下旬発売予定